

絵本の読み方

お子様が絵本を通じて新しい言葉にふれる時間は特別なものです。

優しい吐息、ひそやかなささやき、おののきを秘めた低い声。これらは、子どもたちにとって「声の言葉」を聴く貴重な体験となります。近しい人の温もりを感じながら、声によって絵本が語られる。その言葉は機械から出てくる「音」とは異なります。

一方、「絵」はその存在を主張します。やわらかなタッチ、曖昧な輪郭、力強く太い線、思いがけない変化を見せる色合いなど。描いた人のメッセージが込められた絵は、子どもたちを果てしない想像の世界へと誘う、「物語る絵」と言えます。

丁寧に注意深く選び抜かれた言葉と「物語る絵」。子どもは、絵本を誰かに読んでもらうことによって、同時にこの二つの世界に浸ることができます。耳から聴き、絵を見る、絵を読む。そうやって、子どもたちは、自分の中に物語の世界を創っていくのです。

また、読んでもらう途中で、対話が生れます。「それから、どうなるの?」「これ、一体何なの?」。TVやCDの「おとぎ話」は一方的で、対話は生まれません。膝の上の絵本ページをめくりながら、読み手と交わされる「脱線の対話」(片岡徳雄)こそ、その子にしか持ち得ない世界観、自分の核をつくっていく作業の契機となるのだと考えます。絵本を通じて取り込まれた言葉は、単なる知識ではなく、自分と周囲の人々、そのもつと外にいる人々との関係をかたち創っていく行動につながっていくのです。

子どもたちを見守ってくださる全ての方々、どうぞ、子どもたちのかたわらで読み聞かせをする、そのひとときが醸し出す深くて豊かな意味を、存分に味わってください。

そして、子どもたちのためだけではなく、時にはご自身のために、独りで絵本のページをめくる時間を生み出してください。「新しい自分」「今まで気付かなかった自分」を発見し、潤いのある時間を手にすることがきっとできると思います。

以下、絵本のきほんを書かせていただきました。登園自粛でご家庭で過ごす毎日、親子で絵本を楽しまれてはいかがでしょうか。

絵本のきほん

1 何のために絵本はあるの？

「楽しみ」のため。

親と子どもの水入らずの楽しく、幸せな時間。

温かな思い出と心の絆づくり。

子どもに字を覚えさせる、はみがきなどの仕方を教える。絵本は子どもに「役に立つこと」を教えるもの？いえいえ、楽しみのためのものなのです。

絵本は大人が子どもに読んであげるもの。小さなおしりをひざにのせて、お互いの温かみを感じながら絵本を開く。

同じお布団に入って絵本を見上げ、物語の世界を旅する。そんな時間は親にとっても、子どもにとっても水入らずの楽しく、幸せな時間と思います。

忙しい毎日だからこそ、五分、十分の絵本の時間を持って見る。その温かい思い出は親子の心の絆へとつながると思います。

2 絵本を買ったのに子どもが読んでくれません

絵本は大人が子どもに読んであげるもの、

子どもが「耳で聞く本」です。渡しておしまいではなく、

読み聞かせの行為が、大人からの自分に対する愛情を感じています。

「これよんでごらん」と子どもに絵本を渡しておしまいにしませんか。

幼い子どもは字が読めませんから、大人が声にしてお話を届ける必要があります。でも、それだけではありません。信頼できる大人が読んであげてこそ、安心して物語の世界へ入って行くことができるのです。子どもにとって「こわい世界」の物語、誰の声ともわからないビデオなどの世界にひとりで置き去りにしないでください。

読み聞かせの行為に子どもは、大人の自分に対する愛情を感じ取っています。

3 読み聞かせしたけど聞いていないように感じます

無反応だと「せっかく読んだのに…」

と感じるかもしれませんが、子どもはちゃんと聞いています。読み続けることで、子どもの聞く力が育ち、想像力が豊かになっていきます。

赤ちゃんは大人が話す言葉を聞いて、言葉を得ています。母子ふたりだけの環境で一

方的に話しかけ続けるのが難しい時は絵本を読んで、すぐれた日本語を届けてあげましょう。

4、5歳以上の大きな子どもが無反応だと「せっかく読んであげたのに」と感じるかもしれませんが子どもはちゃんと聞いています。音読することになれていないわが子相手でも最初は緊張しますし、その反応も気になりますが、反応を求めすぎると子どもがいやになってしまうことも。

「物語を聞ける力は目に見えない世界を自分の心の中で見えるようにイメージする力。一般的に想像力といわれる力です。子どもの想像力は直接、間接の体験を通して獲得されるもの。体験が豊かであればあるほど、想像力も豊かになるでしょう」

(松居直著『絵本とは何か』より要約して引用)

4 子どもが集中しません

絵本になれていないせいもあります。

最後まで読まなくてもその子が好きなページを開き

子どもの絵本に対する反応を楽しんでください。

「最後までよまなくては」といった気持ちはいったん忘れて、その子が好きなページを開き「おいしそうなりんごだね」「かっこいい車だね」などと声をかけてみてください。「これでいいのかな？」と思う日が続くかもしれませんが、徐々に子どもは絵本になれ、やがて一冊を最後まで聞ける日がやってきます。

一方、大きな声を出したり、大げさな演技や扮装で気をひくのはおすすしめしません。注意をひくとは思いますが、それはあなたに対してであって、本に対してではないからです。まずは読み手である大人自身が、絵本の世界を十分に楽しんでください。

5 途中でどんどんページをめくってしまいます

ページをめくる動作を楽しんでいたり

長いお話に飽きているのが原因のようです。

1、2歳の子は「ページをめくる」という、新しく覚えた体の動きを試したいのでしょう。そのままめくらせてやれば良いと思います。期間はまちまちですが、しばらくすれば、しなくなります。

4歳くらいでもめくってしまう場合は、その子の許容量を超えた長いお話で、つい

ていくことができず飽きているかもしれません。絵本の内容がその子に合っているかどうか再考してみましょう。家庭の場合は、めくってもそれでいいのではないのでしょうか。その子も、園では先生が読んでいる絵本を、みんなと一緒に静かに聞いているかもしれません。

6 感情を出して読む？淡々と読む？

無理せず、自然に。

子どもの様子見ながら「ゆっくり」と。

声に出して読んでいけば、物語の展開に合わせて自然と気持ちが言葉にのってきますね。その「自然と」が大切だと思います。

上手に読む必要は無く、無理せず自然に読めばいいのです。

また、子どもがお話についていけるように、様子を見ながら「ゆっくり」を心がけてあげてください。

7 書いていないことを口にしてはだめ？

テストのように

「これは何？」と大人から問いかけると物語の世界が崩れます。

でも、子どもから

「これなーに？」と聞かれた時はどうぞ答えてあげてください。

絵本を教科書のように使われる方がいます。ページをめくる度に、テストのように「これは何？」と問いかけてしまう。これだと物語の世界が崩れてしまいます。なにより、気楽に絵本を楽しめません。

でも、幼い子どもだと、子どもの方から「これなーに？」と聞いてくるものです。そんな時はどうぞ、答えてあげてください。大人との双方向のコミュニケーションも絵本の大きな魅力と考えます。

8 読んだ後に、どう感じたか質問しないほうがいい？

読み終えた後に、あれこれと質問をして、

無理にわからせようとしないでください。

読み終えた時の喜び、満足感を守ってあげてください。

「絵本は読みっぱなしでよいのです。特に家庭では、絵本を読み終えた後、あれこれと質問をしたりして、無理にわからせようなどとは決してなさらないでください」

(福音館書店パンフレット「絵本の与えかた」より)

読み終えたときの喜びや満足感を大事にしてほしいと思います。

読み終えた後、子どもが黙っていると「どうだった？」と聞きたくなるもの。でも、そこは我慢をし、「おしまい」に。なぜなら、子どもが質問に備えて物語を見てしまうようになるからです。

もちろん、子どもから「このお話、どういうことなの？」と話しかけてきたら、「それはね」と答えてあげてください。

Q 「よい絵本」を選ぶコツは？

目安は「成人式を終えた絵本」

まずは古典にふれて、

目を養いましょう。

たくさんの絵本があり、その中から「よい絵本」を自分で選ぶのは難しいですね。

ひとつの目安として、その絵本が出版されてから、二十年以上読者に指示されている、

子どもたちに喜ばれているということがあります。

たとえば、『ぐりとぐら』は一九六三年刊行です。もちろん、新しい絵本の中にもよいものはあると思いますが、まずは、古典にふれて目を養ってはいかがでしょうか。

絵が「渋い」「古い」という印象より、

絵が「生きている」基準で。

また、すすめられた絵本の絵がぴんとこず、「渋い」「古い」と感じた場合でも、だまされたと思って、一度読んでやってください。長年愛される絵本では子どもが感情移入しやすいよう、物語が生き生きと巧みに描かれています。子どもにとっては古い、新しいということより、そこに描かれた絵が「生きている」かどうかのほう
が重要なようです。

10 デジタル絵本はダメなの？

**子どもがひとりで見る「音のある」デジタルではなく
親が自分の声で言葉を届けるあたたかさを。**

デジタル絵本には「音」がついているものが多く、また、子どもは発光体に惹きつけられます。結局、子どもひとりで見るが増えるのではないのでしょうか。繰り返しになりますが、絵本は、親が自分の声で子どもに言葉を届けるからこそよいのです。

また、液晶画面の光の明滅は脳を興奮させますから、おやすみ前には向かないと言われています。

絵本を読んであげる直接的な関わりの中で、子どもがやぶったりした絵本は将来、家族のよい思い出につながると思います

理事長



